思いっきり楽しく生きて来た

山下　瑞穂

分不相応な仕事に恵まれ且つ異郷の地で七十七歳まで昼の仕事にも夜の仕事にも精一杯頑張り通し、今振り返ってみて、全く何の未練も無い、全く悔いが無い、何時死んでも良い……本当に未練は無いの？と聞かれても全く未練が有りませんと答えられる、とてつも無く楽しい人生を送って来た土佐漢の話です。

前　章

国の内外で数十のプラントを立ち上げて来ました。同時に工期短縮に命を懸け、逸早く操業開始出来る事に全情熱を注いで来ました。絶対に遅れない事を信条として来ました。その信用は破った事が有りません。

三百名弱の会社に幹部候補生として入社して以来十九年間で七千名まで急成長した会社に入社したわけですから、仕事は幾らでも有りました。この事が小生の一生を非常に幸運にして呉れました。然も本当に若い時から。

日本最大の建材工場群を設立したり、建材以外のいろんな工場を立ち上げたりしましたが、日本での話では幾ら面白いエピソードを開陳しても、大して興味を持って呉れそうも無いので、海外での経験をメインにお話しましょう。

海外生活も、普通の人では想像出来ないような長さと渡航回数です。週に二回も海外に出たり、一日に四回飛行機を乗り換えたり、２０１１年は年間十二回も海外出張しました。そこらじゅう、行って居ります。ナイトアンドディで頑張って来ました。当然、交通事故も航空事故も多数経験して居ります。

飛行機事故はメキシコとブラジルでセスナ機が二度不時着、アフリカのケニヤでは大型のジェット機が鳥の群れを吸い込み、エンジンストップで千メートル以上も急降下、機内では七十人位の乗客の内四十人位は血だらけ、スチュアーデスは黒人なので真っ黒く余り出血の血の色は派手には見えません。でもひっくり返っていました、日本人は機内に小生たった一人、偶々ベルトを着用し寝て居ましたのでボヤッと寝ぼけていました。漸く翌日応援のボロ機が迎えに。

前述のセスナ機では燃料切れで海岸の砂浜に漸く降りた事や、軍隊の空港に燃

料を分けて貰いに降りて行った所、三時間も尋問に会ったとか、色々の事件も事故も、恐らく同窓生の何方も経験してないでしょう。

飛行場長にも成りましたよ、ニューギニアでの事、自分の会社の敷地内に飛行場を造成し、当国の国土交通大臣の元で飛行場長を委託され牧師立ち合いで宣誓式をさせられたり、勿論内緒でしょっちゅう自分で操縦桿を握ったり。

アマゾンでは大きな積乱雲の中に運悪く突っ込み、隣席のパイロットが顔中冷や汗でびっしょり且つ震えながらカトリックの神様を呪文のように唱えているのを横目で眺めると、アー、小生も此れで我が人生も御仕舞いかなぁーとも思っていましたが、未だに命があるって事は、格言に曰く、悪運の強い奴は早く死なねぇーて事でしょうな。

本題の前に軽く二つ程。

シンガポールの工場、此れは合弁事業でしたが、結果は大失敗です。相手はしたたかな華僑、役員会では日本側と彼等でいつも２対２、最後にチャーマンが全て華僑側に挙手、ここで完敗。

だけど、良い教訓が身に沁みた。合弁の比率は絶対に４９％では負ける。必ず

５１％以上出資すべきだと、今後の海外進出のマニュアルが出来た。

フィリッピンの工場、この案件は９０％小生一人で始めてそして一人で終えた、相手はマルコス大統領に次ぐＮＯ２の国防大臣、引き合いがあり十八回も出張した、三年掛かって漸く完成。大臣には何でかえらく気に入って貰って大臣の豪邸の中の一軒を提供してくれ、勿論、食事、家事全般、車、設計事務所の提供等、あらゆる便宜を図ってくれ、１ドル三百六十円の時代に小遣いとして三千ドル毎月呉れた。出張旅費はあるし、家族は給料が丸々入るので、こんなに有難い仕事は無かった、が悪銭身に付かずで殆どがカジノ通いで無になって行った。

他にもインドネシヤの工場、インドの工場等幾つか有りますが、スケールのでかい、とてつもなく苦労をしたブラジル、アマゾンのプロジェクトを中心にお話します。

第一章　無茶苦茶な飛行機での移動

先に飛行機は無茶苦茶乗りましたよと書きましたが、七十五歳で毎月渡航しそれも十四回も、とは、歳を考えれば、上等ですよ。若ければ何とも無いでしょう

が、これは値打ちが有ると思いますよ！こんな無茶な数ある経験の中での極め付けが次の話です。三十七歳の若造の話です。

１９７１年1月４日、零下二十八度Ｃのモスクワのホテルの一室に丁度二十二時頃でそろそろ就寝をと用意し始めた頃、日本より国際電話が入って来ました。先方が「急いで山下に来てくれ、直ぐにでも契約条件の詰めを行いたい、工場立地も推薦できる場所が見付かった…」と言っているようだが、目先の優先性を考えるとブラジルが手っ取り早いと思うので、電話した、君が一番良いと思う方を選び決定頼む、相手は出来る限り早くとばかり言っているが、どうだろうか…との事。向こうは専務とは言え、サラリーマン思考、此方は戌年（土佐犬）Ｂ型、おまけに獅子座、直情径行男…間髪を入れず、直ぐに発ちますと答え、電話にて部下の課長に夏服、旅行日程、ホテルの手配を指示した。

この間に思いもしないエピソードが有った。翌朝の引き継ぎ会議の後に、モスクワでお世話になった駐在商社員の奥様が来られ、此のたび帰国されるようですが、その際、是非とも下着を全部残していって下さい…とえらく真剣にお願いされたのには、正直たまげた！！（何でや）既に使用済みにて新品は全く有りませ

んが、とやんわりと断ったが、奥様曰く、この共産国ロシアでは下着は全て配給制で非常に入手困難、買いたくても買えない、と説明を受けた、事情を知ると共産圏に滞在されている人達の苦労が身につまされ、当方涙が出そうになった、勿論今夜の飛行機の中で着るものだけを残して、汚れた下着、パッチ、毛糸のセーター等、殆どを差し上げた、尤も流石に使用済みのパンツは恥ずかしかったが…日本から持参した防寒帽子だけ此れは恥ずかしくて捨てて来た、何故ならロシヤの人達は相当下層の方々でも、日本であんなに超高価なミンクの帽子を当たり前のように被っている、此方は安物の毛皮、何でも零下三十度Ｃ以下になると頭の中の脳味噌が凍って来るから傘は忘れても帽子だけは絶対必需品だとか。

さて、ブラジルのプロジェクトは、全て小生一人で会社を揺り動かして来た案件ゆえ、何事にも他に換え難く、翌朝モスクワプロジェクト関係者との引継ぎを決め、急ぎ極寒のモスクワを離れ夜行便に飛び乗り羽田に帰国、家内が大阪から、わざわざ羽田まで夏服を持って来てくれ、空港内のＶＩＰルームで極寒服を今度はアマゾン用の真夏の服に着替え、極暑三十六度Ｃに備えた格好で ろくすっぽ体温調節する時間も無しに、かの地に向け出発した。そしてニューヨークに着いたが、えらい失敗！ニューヨークの気温を全く頭の中に入れて居なかったので、エ

ライ目にあった。

其処は零下十五度Ｃの世界であった。夏服だけではとても無理、空港に着くや否や身体中震え上がった。ホテルからは一歩も外へ出られず、部屋の窓からエンパイヤステートビルを淋しく眺めていた、日本を出る時には、ネオンで彩られた市内を歩き回る予定だったのに、特にフィフスアヴェニューからブロードウエイまで少々遠路でもしっかり散策をと楽しみにしていただけにガックリ、部屋のテレビは英語ばっかりで仕事以外の家庭英語はさっぱり理解出来ず。行き先に不安が一杯の旅行第二夜を過ごした。此処での一泊以外は機内泊ばかり、何でニューヨーク廻りにしたか、恨んだ。

早朝便にてマイアミに向かう。其処から先はドミニカ、プエルトリコ、セントビンセント、トリニダードトバコ等東海岸を飛び寄港しながら、漸くブラジルの最北端アマゾン川河口から千八百㎞上流の自由都市マナウスに到着、再び国内航空に乗り継ぎしパラ州の首都ベレンに入った。一体何時間掛かったか、数え切れない、モスクワー羽田が当時十五時間、羽田ーニューヨークがカナダ経由で十六時間、マイアミまで四時間ぐらいだったかな、其処からカリブの諸島を経由して

確か七時間ぐらいだったと思うが、当時は頭がクラクラしていて計算不可能。マイアミを出るともう暑くて暑くて空港寄港の度に休憩時間に背広を脱いだり、アンダーシャツを放り出したり、そんな事しか記憶が無い。次は西海岸廻りにすると誓った事だけは覚えている。勿論スチュアーデスは格別ボニータ！！

あっ、そうそう 機内で飲み水を要求したら、「センガス」と聞かれたが意味が分からず、聞き直したら、炭酸ガスが入っている水と普通の蒸留水の二種類が有る事が判明、同時にスペイン語かポルトガル語の必要性を痛感、ヨッシ、覚えてやろう！！

そんなこんなで幾ら若いとは言え、僅か二日半で零下二十八度Ｃからプラス三十六度Ｃまで六十四度の人間体温モルモット試験を体験させられたのには、全く閉口。二度とこんな目には会いたく無いなぁーと、呟いていた。
こんな仕事旅行は七十七歳で仕事を終えるまで、海外だけでの仕事は数えて三十五年以上も続いた。少しエピソードでも聞いて貰おうかなぁー、そんな考えで本文を書いた次第。

最初は上田君から「くろしお」に何か書いてくれや、との依頼があった、が少し迷った。

あの同人雑誌の内容は高級過ぎてとてもじゃないが、小生の日頃読んでいる本のレヴェルとは懸け離れており、「くろしお」の品位を落とすような文章しか書けない小生の筆致では、他の執筆者に嫌悪感を抱かせるだけでは…と考えた次第、半日ぐらいは考えあぐんだ、だけど逆に皆が気楽に読み捨てられる読み物も又一興かとも考えた。そこで請けた。

今までの投稿者の各位はそれぞれ日本の各分野へのトップを歩いて来た方々ばかりである、土佐高校在籍時代から彼等の将来像を容易に推測出来た人達が圧倒的に多い、あいつなら東大の教授に成って当たり前、あいつなら通産省の参事官になって当たり前だと、周りの想像通りにそして期待を実現されて来た一流人、活躍されたステージが違い過ぎる。

又皆さんの数多い渡航先や訪問先を本で知れば知る程、後進国専門の然も赤道直下ばかりで仕事をしていた小生とは違い過ぎ…皆様の行き先は、憧れの華やかな場所ばかりで嫉妬さえ覚える所、文章にしても興味を持って読んで呉れる他人

はいないのじゃないだろうかとも考えた、

唯、此れだけは言えそうである。特にM君などは国の代弁者（そう思ってはいない、というなら御免）として日本の国の為に頑張って来た筈、それに引き替え小生の立場は失敗したら何時でも首を切られる、一サラリーマン、工場建設をし、生産軌道に乗せるまでの、ターンキーベースの仕事で、彼に比べると余りにもスケールの小さい仕事ではある、然し、この小さいプロジェクトが寄り集まって、日本を未曾有の高度成長路線に導いた、ほんの一助になっていた事も事実である。だから卑下はしなくても良さそうである。とも考えた。

其の苦労の一部を、諸兄に知って貰えるのも暇つぶしには如何かと思った次第。アフリカ時代、南米時代、東南アジア時代、思い出は尽きない、エピソードを中心に二、三回は書いてみたい。土佐高校時代の存在からすれば、誰からも歯牙にもかけられていなかった筈の男の、余りにも「分」を超えた体験談である。真実のみを書いたつもりである。　諸兄に　へェー！！と言われる様な話と受け取って戴ければ幸甚。

本論に入る。
最初に書いたブラジルのプロジェクトは大成功した、それには一サラリーマンの意地があった。
我が社は、五、六年前にシンガポールに既に合弁工場を一工場持っていたが、今度、会社は合弁では無く単独でもう一つ最速で高利益の見込める工場の建設をと考えた、然し、全従業員の中で小生一人が大きな声で大反対を唱えていた、理由は簡単である、シンガポールの国の将来の存亡は、今後流通と付加価値の高い製品の製造、輸出、或いはそれらの中継でしか生きて行かれない、マレーシヤとの分離が此処二、三年中に必ず始まれば、現在無税で入荷されている原資材が十五％も税金を払わされる、となると利益が吹っ飛ぶ、一年以上も住んで居たので中国人の経営理念は良く判る、工場建設には原木が自給出来る国に進出すべきである！！これが自説である、皆にそう説いて回っていた。

ところがある日、社長秘書より役員会に出席せよとの連絡があり、こっぴどく叱られた。ワシが進出を決めたのに貴様だけが猛反対しているらしいが、お前は馬鹿か、と散々であった、挙句にトットの馬鹿か！1と言われた、
トットの馬鹿とはどんな意味だろうかと怒られていてもクールに自問していた。

本件には一切関係持つな（全役員の冷ややかな目付き！）と言われ退席したが、自分の机に戻って良く考えてみると、大分焦ってきた、

サラリーマンになったからには、必ず役員にはなってやるぞと、考えて生活設計を立てていた出世の計画がすっかり狂ってしまいそうだ、大ピンチになりそうだ。エライコッチャとお先真っ暗の気分、何とか挽回策をと考えて、雌伏三年、この間、国内の工場建設をズット手掛け、給料分は稼いではいたが、何せ派手な花火を打ち上げないと出世出来ないし、土佐男の値打ちも無い。

そこで、アフリカ、フィリッピン、マレーシヤ、インドネシヤ、インド、カナダ、中南米等、建築資材の多い地域をしっかり調査、最終的に世界一資源の多い国をターゲットにしてみてはと、考えた。（追記。シンガポールの工場は結局数年後に閉鎖された、だから俺の話を聴けと言ったのに）

そして挙句の果てアマゾンに辿り着いた、ところが全重役、アマゾンとは何処や、位しか知識が無い。このままでは費用の出所が無い、其処で通産省の技術協力課に補助を頂戴し木材産業推進プロジェクトの名目で政府調査団として戴けた。此方は御座なりでは無い、話は順調に進んで来たので、その後四回も南米ブラジ

ルまで出掛けた、行けば往くほど余りにも興味を惹かれる場所だった。
　然し家族全てを引き連れてまでは子供達の教育を考えると、単身赴任しか…
此れを頭の中の片隅に置いてプリジェクトを物凄い勢いで推進した、
そして、とうとう日本側の合弁商社も決まり、ブラジル側のパートナーも決まり
いよいよ出発進行。

　１９７２年、五回目の渡伯で上智大と天理大のポルトガル語卒業の部下二人を
連れて南米最大の建材工場を建設する事になった。（投下資金六十五億、従業員三
千八百名）ところが此の二人が学校で学んだ言葉が現地ではさっぱり理解出来ず
到着後空港で既にノイローゼ、翌日は銀行に口座開設に行ったが、こんな事すら
満足に出来ず小生が英語で実施、ホテルに帰るや否や「お前達は詐欺か」と小生
に怒鳴りつけられる始末、従い何から何まで、本当に何から何まで自分で合弁会
社の設立から自分の宿舎まで自分で手配した、
　日本でも、会社、工場一つ立ち上げるには結構何やかやと色々有る筈だが、海
外の然も秘境の地と言われるアマゾンに作る訳だから大変なんて物じゃ無い、
工場敷地は百二十万坪を私の名前で購入した、一口に百二十万坪と言うがジャン
グルを買うのだから、大変を通り越していますよ。

序でながら宿舎でさえ土地が千二百坪もありましたよ、最初の六か月位は日本人三人、女中三人、運転手、庭掃除下男と住んでいました。勿論言葉が一番も大変、前述の如くブラジルの言葉はポルトガル語、必死に昼夜勉強して三か月後から役員会は下手糞でも間違っても良いからと日本語を禁止にした。尤もどうしてもと言う時には英語に頼らざるを得なかった、ところが彼等の英語は全く下手！

少しジャングルの土地手配の話からしてみましょう、此れにも思い出が一杯ある、最初はセスナで機上より地勢調査、次はヘリコプター、そして最後に地上踏査。ところが此れも大変！ロープを身体に巻き付けて進んで行くが、敷地予定地の端っこのアマゾン川に届かない、二日目は細引きを持って行ったが、４㎞の長さのロープでも届かない、三日目にはとうとう、釣りのテグスを６㎞ほど持って出掛け漸く敷地の端から端まで到着した、余りにも今までの日本の常識を超越した話、その後こんな話を一般の日本人に説明しても全く理解してくれない、単なる大風呂敷と思われるだけだった、おまけにジャングルの中には毒蛇が沢山いるとか、豹が人間を襲うだとか、５㍍のボアー（アナコンダの一種）がいるとか、だが実際に怖いのは２・５㎝を超える大蟻だった、これに食われると一晩中痛痒くて大の大人が唸り廻ると聞かされ、毎日がオッカナ吃驚の連続だった。

ちなみに何故河に面した場所なのかと言うと、原子材の原木水中貯木場が工場立地の必須条件、ところが又これが面白い、川なのに干満の差が酷く、此れが又日本の常識を遥かに超えて十㍍に近い、日本海岸は僅かで、北陸敦賀市に建設した工場で四十㎝以下、太平洋沿岸は大きくて大阪や千葉では五㍍ぐらいだったので、現地では設計変更が大変、それでも水面面積四万坪を現地人の人力で作ったが四か月を要した。面白い話だが満潮で百二十万坪が干潮の時は百六十万坪ほどに面積が増える、こんな話を本社に報告しても全く理解して貰えなかった、序でながら、小生が実際に見た干満の差が一番激しかった港は、韓国の仁川港で十五㍍を超していた、唸った！

序でにもう一つ、アマゾン川の対岸までの距離が２２０㎞、大阪から名古屋までの距離が川幅、信じられますか？一番河口にマラジョ島と言う三角州がありますが、其の面積が何と九州と同じ面積、三角州なら大阪の中之島しか知らない私ですが、こんな所に何年も住んでいたら大概大風呂敷になりますよねー。

序でに大風呂敷の話をもう一つ、パートナーの候補者の一人が週末に彼の家の別荘でビキニ３，４名同伴して家の池でモーターボートにでも乗って来たらと、

言いおる、　家の池で？？ボートが走れるのか、　何をエラソウニ！と
内心思ってフザケルナと口に出掛かったが、直ぐ後で話を聞くと何と彼の持っている土地は四国と略同じ位の面積のケタ外れの大地主だそうである、それなら先の見えないような池や、湖の一つや二つは持っているだろうなぁー、ブラジルでは今後大風呂敷なんて言葉は禁句！！

仕事の話に帰りましょう、日本でなら沖縄開発大臣とか北海道開発大臣に当たるアマゾン庁開発大臣に週に一回は必ず説明に行ったり、パラ州のギリオン知事には週二、三回は面談に行ったり、州道路より工場までの長さ４㎞、幅２０㍍の道路を無償で建設さすべく交渉をしたり、勿論従業員三千八百名ほど雇う事が此方の説得条件にしたが、先方にとっても、ベレン市最大の工場が出来る事の方が雇用の面で大きな魅力である事は計算づく。

あれや、これや、広大なジャングルを日本の尺度で言えば、約八十万坪ほどを伐採開墾して工場敷地を作り、建物は４５㍍×３００㍍、の主建材工場、若干小さめの２次加工工場、計３棟を建設、毎日テンガロンハットを被り陣頭指揮した、工場周りの土地は植林の義務があった。九か月後には全部日本製の機械が到着、

此れも陸揚げからジャングルまでの運搬、そして日本人技師四十名を招いての据え付け、毎日が楽しくて楽しくて仕様が無かった。苦を苦と思った事が無かった、少し気分が悪い時は横手のジャングルに入り。ピストルをぶっ放してストレス解消をしていた、結構上手ですよ。四千発は撃ちましたね。

お蔭で十五か月後、工場が予定通り生産開始される頃、ＮＨＫのテレビが入り「海外に働く日本人」と言うタイトルの中で小生を中心に３０分番組で録画され日本で放映された、ソニーまで出向いてダビングして貰って所蔵している。

此れも思い出の一つ。ブラジルの思い出を、若し面白可笑しく書き上げるなら百ページを超えそうですからこの辺で終わります。

愈々、最後のケリをつけるべく開所式を盛大に行い、日本から態々アマゾンまで訪問戴いたのは、本プロジェクトの日本側パートナーであり現地製品の全営業を行ってくれる日本最大のＭ商事の本社常務を始め、小生の会社の社長と役員三名、更に日本から南米アマゾンまで飛行機をチャーターして本社のお得意特約店様二百名をご招待（当時は特約店の方々を海外に、と言う営業政策が大流行だった）、勿論ブラジル側は大統領、アマゾン開発長官、パラ州知事等、多数が出席さ

れた、日本政府からはアマゾンの谷総領事が出席下さった。
これにて私も漸くお役御免。社長を交代して日本に凱旋した。工場の正門に五十人ほどが集まってくれ見送ってくれたが、殆どの人が「オトラベスアキー」と、日本語では「又此処に来て下さい」との事だが、今でも嬉しくて嬉しくて頭の片隅に残っている。

この合弁事業には相手捜しに会社の一番のお得意様の関西系商社を資材部、営業部から推薦があったが、小生は社長を丸め込み、ワザワザ地球の真裏まで進出する建材メーカーとしては誰一人も考え付かなかった、業界最大の大事業ゆえ、商社も天下の超一流を選びましょうと勧め一任して貰った、勿論腹案は有った。

此処で土佐高校が出て来る。土佐高校の先輩がM商事の南洋材原木部次長の要職におられた、我が社がメイン商社では無いので余り深い商売上のお付き合いは無かったが、小生が腹を割って事情を説明したところ、真剣に話に乗って頂き、快く前向きに話に乗って下さって重役への面接が叶った、此れが推進役となり事業が成功裡に至ったと言うエピソードもあった。最終十九億円出してくれ、然も途中何にも言われず、それこそ一言の文句も無かった、感謝、感謝である。

後で他の若手社員に聞くと、お前達は素人だから、プロには何も言うなとピシャリと言ってくれていたそうである。流石、土佐男！

話が飛ぶが、此の土佐高校先輩の次長とは後日談がある。七、八年後に彼から今度はわしを助けてくれる順番だとの事、M商事の子会社の建材工場が8年連続して赤字なので此れを救ってくれとの電話で、翌日大阪から東京に出て来いとえらく急がれていたので、行くと其処には既に木材部部長になっていた土佐高の先輩と子会社の社長が東京駅に迎えに来ておられ、そのまま船橋の工場に連れて行かれ、此の工場を助けてくれと懇願されると、もともと浪花節的文句の好きな小生、且つブラジルの時のお礼を返そうと思い、電話一本のお誘いで然も後先考えずに一日でお受けする事にした。頂戴したご親切は此れで返せた。此れは後日談。

序でながら、この工場は徹底的に良品質の製品を製造し付加価値を数割上げる作戦に切り替え、勿論高性能な機械の更新等、設備投資を認めさせて八か月後からは見事に黒字転換出来た。商事の方々からは非常にお褒めに預かった。

此れを機会に商事の関係先のフィリッピン、インドネシヤの仕事が急増してき

た。此の時に相手を説得するのに小生の取得していた特許がえらく役に立った。
サラリーマン生活（技術者）が二、三年続くと欲が出て来て技術力で業界のトップに成ってやろうと心掛けた、幸いにも一部上場会社とは言え、たかが住宅建材メーカーである。必死に考えれば何とか成る、然も安月給である。家計を少しでも楽にするには特許を取るのと、色んな免許資格を取るのが一番の早道（給料が上がる）…と此れ全精力を注いでバンバン取った。

お蔭で最終的に三十三件の特許を取得出来た。（勿論余りにも大きな、業界に影響のある案件は社長の名前にしたが）最近は調査不足だが、確か二十年前までは建材メーカーではトップだった。

そうなると、次の目標はこの職種の何とか世界一になれないかと考えた。丁度高度成長時代なので工場の新設、増設の話が一杯あった、これ等の設置設備機械に小生の特許が一部不可欠の物があり、必然的に工場の設計施工の話が舞い込んで来た。
プラントとなると、機械、電気、化学、建築、土木等、それぞれのプロの足元位の知識が無ければプラント建設は引き受けられない、しようがないので、それ

こそ必死に勉強した。知らない事は全く恥を恥と思わず教えを乞うた。乞いまくった。ちなみに何で化学かと言われると、材木の接着には有機化合物が多く使われるからで、接着剤の工場も勉強して自分の設計で日本の自社工場や、ブラジル、フィリッピン、インドネシヤ、シンガポールの海外に４工場を建設した。お蔭で化学反応は少しは通になった。時代が良かった。其の程度で通った。

いつの間にやら建材の工場で、海外に八工場、日本で二十六工場を、何れもターンキーベースで設立した。自分を褒めてやっても良い仕事をして来たと自負している。勿論失敗も幾つか在ったが、こんな事もあった。工場の鉄骨を立ち上げしっかり固定をして。さぁー上棟式だとばかり、職員二十～三十人を引き連れて宴会、次の日に現場に行くと三百㌧の鉄筋建物が全壊、ひっくり返っている…半分泣けた。でも振り返ってみると成功が遥かに多い。良く身体が続いたなーと今になって思っているが、楽しくて楽しくて。

だが一番最初に申し上げた通り、自分の「分」は越した事は無い、そんなに緻密な頭脳は持ってはいないので自分が自身の能力以上の仕事以外に手を染めた事は無い。山下は公文や前田や森下君達とは違うのだから、この信条は完璧に守っ

た。自分の住む業界のＮＯ１に成れたらそれで満足だと常に身を律した。
お蔭で数の上では業界では世界一に成れた。大きな苦労もあったが、今は楽しかった思い出ばかり。こと仕事に関しては何時、今、死んでも何の未練も無いと言い切れる。だがその反面、家庭は放りっ放し、だったと思う。慙愧！

所で、この海外での仕事がその後の自分の生活、仕事に多大な楽しみを齎してくれた、それは幾つかの外国語が比較的自由に喋れるようになった事である。小生は其の国々言語を他の人より早く覚えられると言う特異な性質が有り、割と早く喋れた。此れがその後の仕事で物凄くプラスになった。官費で外国語を習得出来るのだから、こんな有難い話は無い。
この質とは何かと考えると、どうも人前で恥ずかしがらない事だと思う。外国の大統領に会っても、大臣に会えた時ても「あがった事が無い」、全く平気の平左、そして知らない事には恥ずかしがらずに、何でも平気で教えを請うた、知らぬが恥だと。全くの他人でも直ぐに友人になれる。調子が良いのかなぁ…。

序でに住み難かった国は、言葉以外に湿度が高い国、タイがそれ、大西君が永住していると聞くが尊敬します、他にアマゾン、ナイジェリヤ、日本人には無理。

酷かった。反対にこの世の極楽はカナダのバンクーバー、もう一つ、東アフリカのケニヤのナイロビ、何故なのかは次回の「くろしお」にて。少ない年金生活でゴージャスに楽しむにはマレーシヤ。

ブラジルから日本に帰国すると、又々大事業が待っていた、日本一の建材工場を早急に作って呉れとのお達し、何せ佐藤栄作首相の第一秘書から購入した土地だから色々あった、本当に！眉に唾つけねばと言った話が一杯あるが、次回、サラリーマンの才覚では絶対出来そうもにも無い話が沢山あります、又、小生の人生で一番女性に時期でもありましたし。こんな時期は男が一番活性化しているようで魅力があるらしく、それが仕事にも影響して全て上手く廻っていきます。それは実感です。

第二章　仕事の終業（ネシヤに十四年）と夢

１９９０年 業種の全く異なる会社の役員をしていたが、I商事の部長がワザワザ自宅まで来て下さり、日本への輸入商品の品質のレヴェルアップの為に日本の住宅産業に寄与して欲しいと、言葉巧みにスカウトされると、ついその気になっ

て六年間六十八歳までの契約をした。
直ぐにネシヤに入るや現地の関係会社には、これから日本の最高技術を教えるからしっかり習得してくれとの説明を横で聞いていたら、当方もスッカリ、テンションが揚がりっ放し、その気になって精一杯尽くした、とうとう十年以上も契約更改は一度もせず自然延長し、勿論商社側、現地会社ともに非常に大切に扱ってくれたからか、長期間過ごせた。
ＮＨＫだけは欠かさず見て南方馬鹿になる事は避けた。勿論ネシヤからマレーシヤ、シンガポールその他近隣諸国には相当出歩いたが、ネシヤが最も肌にあった。女性もネシヤ人が何でか一番チャーミングだった。

漸くネシヤは卒業出来たと喜び、アメリカ人並みにハッピーリタイヤーと叫ぶ筈が又々、人生が変わった。
今度は現地会社から役員として工場の経営をして呉れと切望され、自分の将来の夢の世界遺産を数多く回る事と現地での仕事を天秤に賭けた。悩んだが未だ健康に心配が無いと思うので、もう少し後三年位働こうと考え直した。
結局、少し長くなって七十六歳まで、２１１１年にいよいよサヨナラパーティーをして貰えた。夕刻現地の自宅に百五十人程集まってくれ夕食を共にした。

お開きの前に二人の若き美女がホッペにチューをしてくれた、此れも思い出の一つ、未だに覚えている。
　翌朝は夜勤の八百名を除き千八百人位の従業員を前にしての「工場長朝礼」此れは毎週月曜日の私の仕事（勿論ネシヤ語で）、此処でお別れの挨拶をして、皆の「スラマット、ダタン、ラギ」日本語で言えば「又早く帰って来て下さい」との嬉しい言葉を背中で聞きながら空港に向かった。

　ちょっと現地の状況を説明しましょう、シンガポールより若干小さい島だったが、島内最大の会社のトップゆえ、一応は街の名士で、街の人も大切にしてくれた、勿論日本食は無いが、中華料理店が五。六軒あったので、そう困らなかった、ストレス解消に、月に二度位は熱帯魚の観察にスキューバダイビングには行っていた。
　そうそう、このダイビングの事で皆さんにジェラシーを与えましょう、この島よりマレーシヤに向けて３００㎞位の所の、絶海の孤島に世界でも有名なダイビングポイントがあり、七年ほど前に当時の小生の彼女、アメリカ人と彼女の友人、オランダ人、ベルギー人、ドイツ人、オーストラリア人全て若き女性、しかも全員別国籍、男性は日本人一人、六人で三部屋を借り切り二日間、潜って来た事が

あった。途中マンタの群れに会ったり、伊勢海老を採ったり、紺碧の海の下に群生する珊瑚礁に集う無数の色鮮やかな熱帯魚は、未だに脳裏より離れる事が有りません、それにしても、外人は徹底的に楽しみますねー！！ひがむな、ひがむな、たまにはこんな事も。そう言えば途中マンタの群れに遭遇して直ぐ海中に飛び込み下から眺めていた。

漸く日本に帰り着いて。挨拶回りに行った先の商社で、又々一年間程マレーシヤ、ベトナム、インドネシヤの販売拡販に一緒に付いて行ってくれと、頼まれ、現地で一方ならぬお世話に成った人の頼みなので、断り切れず短期間の約束で働き始めた。が矢張り一年は越した、実はこの人は部長と言う要職でもあるのに、ネシヤの僻地に住んでいる小生に、必ず日本食や酒のお土産を、他の人より遥かに数多く持参して呉れた人ゆえ、断れなかった、土佐の人間は義理人情に余りにも弱い。漸く完全に引き揚げたのは。２１１２年３月、七十七歳であった。

帰ってからのするべき事、したい事は、家内のリューマチの罹病で、全てポシャッタ。仕事を終え、いよいよ、さぁー自由に世界遺産を廻れるぞと、大喜びする筈が、家内の病気が酷く進行して全てが……落胆も大きかったが、これも日頃

の家族へのホッタラカシが彼女の病気の最大の一因らしいので、全く何を言う資格も無し。目下、真面目そのもので、家内、家内と尽くしてはいるが、家内は全然だと言っている。嗚呼！！

そんなこんなで確か三十五年位は外国暮らしかな、一ペイペイから社長も二回もしたので、もう良いかな、アッチの方も結構楽しめたし。

本当に最後の希望は、世界遺産を百か所廻って観たい、今まで五十六か所観たが、家内の罹病で全てポシャッタ。一時停止かな。

同窓生の皆様を、遺産なら自然のグランドキャニオン、文化のエジプト、遺産ではないが、自然が人類に呉れた最大の贈り物、オーロラ…見学にお連れしたい。

あるいは世界三大夜景とか、滝とか、趣向を変えて世界三大美人国！！辺りの話でも如何でしょう。これには一家言あります。